西森 優貴

解剖実習が始まる前、私はご献体された方と向き合うことへの緊張と、自分に人体を理解できるだろうかという不安を抱いていた。実習に備えて教科書や実習書を用いて予習を進めていたものの、筑波大学では講義と実習が並行して進むため、実習開始時には解剖学の体系的な知識はまだ十分ではなかった。そのため、目の前の構造物が何であるのかを一つ一つ確認し、教科書と照らし合わせながら進める毎日であった。

実習では、教科書に描かれた人体と実際の人体との違いを数多く経験した。血管や神経は平面の図のように整然と存在しているわけではなく、筋や筋膜、結合組織の間を立体的に走行していた。一つの構造を確認するためには、その周囲との位置関係を理解しなければならず、人体を「立体」として捉える力が少しずつ身に付いていった。また、血管の分岐や神経の走行には個人差があり、人体は決して教科書どおりではないことも学んだ。

私にとって最も印象的だったのは、「形を覚える」ことよりも、「なぜその形になったのか」を考えるようになったことである。実習が進み、講義で発生学を学ぶにつれて、心臓や大血管、脳神経の走行は偶然その形になったのではなく、胎児期の発生過程を反映した結果であることを理解できるようになった。例えば、反回神経が大動脈弓や鎖骨下動脈を回り込む理由や、心臓の複雑な構造がどのような発生過程を経て形成されるのかを学んだとき、解剖学と発生学が一つにつながった感覚を覚えた。また、心臓を観察した際には、刺激伝導系や血流の流れを思い浮かべながら構造を理解できるようになり、「形態」と「機能」は切り離せないものであることを実感した。解剖実習は、単なる構造の暗記ではなく、人体を多面的に理解する学びであった。

さらに、実習を通して強く感じたのは、医師に必要なのは知識だけではないということである。人体を前にすると、その身体が一人の人生を支えてきたものであることを自然と意識するようになった。班員と協力しながら慎重に剖出を進める中でも、「学ばせていただいている」という気持ちは最後まで変わらなかった。実習の最後に納棺を行った際には、実習開始時の緊張とは異なり、深い感謝と敬意を抱きながら故人をお見送りした。この経験を通して、患者さん一人一人にもそれぞれの人生があり、その尊厳を守ることが医療の根幹であることを改めて考えさせられた。

将来、私は患者さんを診療する医師となる。そのとき、正確な解剖学的知識や技術はもちろん重要である。しかし、それ以上に、この実習で学んだ「人体から学ばせていただく」という謙虚な姿勢を忘れずにいたい。

最後に、ご献体くださった故人と、その尊いご遺志を支えられたご遺族に心より深く感謝申し上げます。また、熱心にご指導くださった先生方、技術職員の皆様、実習を支えてくださったすべての方々にも厚く御礼申し上げます。この解剖実習で得た学びと感謝を胸に刻み、患者さんから信頼される医師となれるよう、これからも努力を重ねてまいります。

前野 温人

いつも使っているロッカーのすぐ裏手に解剖実習室があることに、私はまず驚きを感じた。扉の向こうにある空間へ初めて足を踏み入れ、解剖台の上にご遺体が並べられている光景を見て、一気に緊張が走った。ビニールと布を開いてご遺体と対面した瞬間に感じたのは、これからの勉強に対する不安と、ご献体くださった方の意思をしっかりと尊重して解剖に向き合わなければならないという身の引き締まる思いだった。

実習中は、アトラスと見比べながら構造を一つひとつ確かめていった。その中で特に難しさを感じたのは、神経の剖出である。アトラスにははっきりと描かれているが、実際の人体では走行や太さが一人ひとり異なっており、見失ってしまいそうなほど細い神経を慎重に剖出することもあった。これほど細い神経を通して、私たちの脳から信号が送られたり感覚が伝わったりしていることに驚かされた。また、解剖が進むにつれて、最初の方に剖出した部分と奥の組織との空間的なつながりが理解できるようになり、予習の段階では把握しきれなかった立体的な位置関係を、自分の手と目で直接学ぶことができた。

実習の中で特に印象に残っているのは、班員と協力しながら解剖を進めたことだ。私たちは毎回の実習前に、黙祷を捧げた上で、前日に各々が剖出した部分について班員同士で説明し合う時間を作った。これにより、頭の中が整理されて知識を体系的にまとめられると同時に、班のメンバーの理解度を確認し合い、歩調をそろえて進めることができたと思う。お互いに知識や手技の正確さなど、足りない部分を補い合いながら進められたことは、とても大きな経験になった。

私は子どものころから人体に興味があり、図鑑などをよく見ていたが、解剖実習で実際の人体を詳しく見る機会を得て、その緻密さと複雑さに改めて驚かされた。それと同時に、自分が医学生として学ぶ上で、ご献体いただいた故人とご遺族への感謝を深く感じた。これまでの医学の発展において、こうした献体がどれほど大きな貢献をしてきたのかを実感している。将来、医師としては生きた患者さんを診ることになるが、人体がどのような仕組みで成り立っているかを実際に自分の手で触れて学べたことは、その際に間違いなく大きな助けになると思う。

最後に、私たちのためにご献体くださった故人とご遺族に深く感謝を申し上げます。また、長期間にわたる解剖実習をサポートしてくださった先生方や技術職員の方々にも心から感謝しています。この実習で得た学びと感謝の気持ちを忘れることなく、これからの勉学にしっかりと励んでまいります。

飯野 真帆

解剖実習の日は、私が想像していた以上に早く訪れた。医学類二年生はゴールデンウィーク明けから六週間にわたって解剖実習を行う。解剖実習は医学部における大きな節目であり、私も大学入学以来、その存在を常に意識してきた。しかし、月日の流れは早く、気が付けば実習開始の日を迎えていた。

「解剖を行う」ということは理解していたものの、いつご遺体と対面するのか、どのような流れで実習が進むのかなど、具体的なイメージは持てておらず、十分な覚悟を決めきれないまま初日を迎えた。実習室へ入ると、そこには白い布に包まれたご遺体が静かに安置されており、厳粛で張り詰めた空気が流れていた。一人の人生を歩まれた方が、医学教育のためにここにいらっしゃるという事実を前に、不思議な

気持ちと同時に、身の引き締まる思いがした。

実習初日からご遺体にメスを入れることとなり、人の身体にメスを入れることへの緊張とためらいを強く感じた。この初めに抱いた感情は、命と向き合う上で大切なものであり、常に心に留めておかなければならないと感じた。実習は毎日の黙祷から始まり、黙祷で終わるが、その時間を通して故人への感謝と敬意を改めて意識し直すことができた。解剖に慣れていく中でも、最初に抱いた緊張や慎重さを失わないように意識し、一つ一つの操作を丁寧に行うことを心掛けた。

解剖実習は、教科書での学びでは決して代替することのできない経験であった。教科書やアトラスでは平面的にしか理解できなかった人体構造も、実際に観察することで立体的な位置関係を把握することができた。また、実際に手を動かして剖出を行うことで、組織の間には結合組織や脂肪が存在し、その硬さや性状が部位によって異なること、血管や神経を辿ることで走行や周囲との関係を理解できることなど、多くの学びを得た。さらに、同じ人体であっても個体差があることを実感し、教科書の知識をそのまま当てはめることの難しさも学んだ。

実習の中で最も印象に残ったのは、最後の納棺である。実習中は、解剖学的な構造を理解することに集中していたが、納棺の際、一人の人生を歩まれた方とのお別れなのだということを改めて実感した。医学の発展と未来の医師の育成を願い、自らの身体をご献体くださったその尊いご遺志に、深い感謝と尊敬の念を抱いた。同時に、この実習で得た知識や経験は、故人の尊いご厚意の上に成り立っていることを決して忘れてはならないと強く感じた。将来、医師として患者さんと向き合う際にも、この実習で学んだ解剖学的知識だけでなく、命への敬意と感謝の気持ちを持ち続けたいと思った。

市原 太郎

私が医師を志した原点は、身近な人が起立性調節障害により目の前で苦しそうにしていた際、何も出来なかった自身の無力さにある。元は大学で経営学を専攻し医療とは無関係の環境に身を置いていたが、病に苦しむ人の力になりたいという想いから一転して医学の世界を目指した。今回の解剖実習は私にとって、医学生としての本格的な一歩となる初めての実習であり、強い緊張感と決意を持って臨んだ。

初めてご遺体を目の前にしたとき、私の脳裏に浮かんだのは、十年前に他界した祖父の姿だった。内科医であった祖父は生前「自分の体が医学生の勉強に役立ててもらえるなら」と献体を希望していた。しかし、当時は親族の心理的な抵抗や反対もあり、その願いが叶うことはなかった。もしあの時、祖父の遺志が尊重され、献体が実行されていたならば、まさに目の前のご遺体のように、医学を志す学生たちの学びを支えていたのかもしれない。そう思うと、献体された方、そして送り出してくださったご遺族の尊い想いが痛いほど胸に迫った。この心に応えるためにも、師であるご遺体から一つでも多くのことを学びたいと強く思った。

しかし、初めての解剖実習は容易なものではなかった。この実習を乗り越えるにあたり、班の仲間には感謝の念に堪えない。実習中、どのような手順で進めれば良いか分からず戸惑う私を何度も引っ張ってくれた班員がいた。頸部をはじめ、非常に繊細な箇所を、次の担当者が扱いやすいようにいつも丁寧

に剖出してくれる班員がいた。心臓や頭部の脂肪除去といった、根気と集中力を要する行程を、一切の妥協をせず最後までやりきってくれた班員がいた。この班の仲間から、お互いの強みを活かし、一つの目標に向かう「チーム医療」の原点を学ぶことができた。

この実習を六週間通して行い、私は医学的な知識だけでなく、医学を学ぶ身として最も重要な姿勢を身につけることができたと感じている。それは「自分の目で観ているものが大事である」ということだ。教科書に書かれた画一的な情報とは異なり、実際の人体は一人ひとり異なり、血管の走り方一つとっても同じものは存在しない。自らの目で観察し、手で触れて確かめることで初めて得られる経験が、真の学びにつながるのだと実感した。この「自分の目で観察する」ということは、将来患者さんと向き合い、病態を把握する際の基礎になると確信している。

目の前で苦しむ人に何もできなかった無力な自分から、献体された方とそのご遺族の尊いご決断、そして志を同じくする仲間の支えのおかげで、私は医学生としての一歩を踏み出すことができた。ここに、改めて心より感謝申し上げます。そして、多くの方の役に立てる医師となるために、これからも学びのあゆみを止めることなく、日々精進していきたい。

漆原 菜々葉

解剖実習が始まる前は、ご遺体を前にして自分がどのような感情を抱くのか分からず、解剖実習を進めることができるか不安な気持ちがあった。実際に解剖実習室に入ると、学生全員の緊張感が伝わってきた。ご遺体を前にすると、ご献体くださった方の命や家族の方の気持ちについて考えさせられ、解剖するということの責任の重さや解剖できるありがたみを改めて感じた。そして、ご献体くださったというご厚意を無駄にしないように、一生懸命取り組もうと思った。

実習を通して、ご遺体の人体構造と教科書・アトラスに載っている人体構造との違いに驚いた。特に、門脈や肝動脈などの血管の走行は教科書通りでなく、ご遺体同士にも個人差があり、実際に剖出して筋肉・臓器との関連を調べなければ特定できなかった。この経験を通して、人間の体は個人個人によって異なることと、外科的な手術を行う際などは教科書通りに進めるのではなく、実際に患者の血管・神経の走行や臓器・筋肉の位置を確認しなければならないと学んだ。

解剖実習の中で、様々な学んだことがあったが、ご遺体を納棺するときが最も心に残った。解剖中はご遺体から学ぶことができることは精一杯学ぼうと考えており、人体の構造について知的好奇心に駆られていた。しかし、ご遺体を納棺する際には、今までの解剖実習を振り返って、私たち医学生が解剖できるようにご献体くださったことへの感謝でいっぱいになった。また、お棺の中には、家族からの手紙や贈り物が入っていることもあって、故人の家族という存在が強く感じられ、家族がどのような気持ちで献体に同意してくださったのか改めて考えさせられた。私たち医学生が解剖という貴重な実習経験ができるように、故人を託してくださった家族の方の思いも無駄にしないように、解剖実習で学んだことをこれからの学びに活かしていかなければならないと感じた。

故人とその家族の方が私たち医学生にお身体を託してくださったことのように、これから医師として働く際に患者さんのお身体を託してもらうようになる。この実習を通じて、医師として患者さんの治療にあたるということは、患者さんとその家族の方に医師としての自身を信じてもらっている信頼関係か

ら成り立つのだろうと考えた。私は、今回の経験を今後の学びに活かし、医学的な知識としてだけでなく医師として患者さんに向き合う姿勢を養い、患者さんとその家族の方がお身体を託してもよいと思ってもらえるような医師になりたいと思った。

ご献体くださった方、またそのご家族の方々、そして解剖実習でたくさん教えてくださった先生、支えてくださった方、本当にありがとうございました。これからも医学の勉強に精一杯励みたいと思います。

大杉 日奈子

私は、医歯学系の大学から編入してきたこともあり、解剖実習の参加経験がある状態で本学の解剖実習に臨んだ。しかし、編入前の大学では解剖後のご遺体を触らせていただき、大血管や主要な臓器を観察することが殆どであったため、ご遺体を最後まで解剖することは今回が初めてであった。

解剖実習室に初めて入室した際は、三十以上の多くのご遺体が集まっていることに大変驚いた。生前に献体登録されていた故人に強い遺志があったとしても、無条件・無報酬でご遺体を提供することとなる。そして、ご遺体がご家族の元に返ってくるまで一〜二年程度かかると聞いている。ご家族はしっかりとお別れが出来ないままご遺体が戻ってくるのを待たなければならず、また大切な故人の身体が解剖されてしまうことを快く思われない方もいらっしゃるだろうと推察する。そんな中、医学の発展や後進の育成のために理解と敬意を持ち、献体に同意してくださった故人とご家族がこんなにも多くいらっしゃると思うと身が引き締まる気持ちであった。

解剖を進めていくと人体がいかに緻密な構造で出来ているかを痛感した。大血管や主要な臓器、太い神経などは一目瞭然だが、皮神経や皮動静脈の細さ、神経叢の複雑な分岐、左右非対称な動静脈の走行など挙げればキリがない程、決して単純な構造ではない。それに加えて個体差があるため、事前に手引書やアトラスで予習し臨んだとしても、毎回剖出や同定に苦戦する日々であった。しかし、その分上手く剖出が出来たり、全ての血管や神経を同定出来た瞬間には大きな達成感があった。特に、神経の剖出・同定はやりがいが大きかったと思う。腕神経叢を剖出した際は、教科書通りの分岐や走行をしておらず、さらには左右でも分岐の仕方が異なっていた。その際、教科書の図と比較して同じような位置・場所にあるからといって同定するのではなく、しっかりと走行を追って導出した過程を基に同定を行うことが重要であると感じた。腕神経叢の筋皮神経であれば、教科書やアトラスなどと分岐や走行が異なっていたとしても、烏口腕筋を貫通して走行している点などの根拠を持って同定していく。丁寧な剖出と根拠を持った同定が、人体の構造の学習をより意義のあるものにすると感じた。

実習開始前のショートレクチャーで先生が仰っていた言葉に印象深いものがある。実際の手術は解剖とは違い、いかに臓器や血管、神経をあるべき位置から動かさず、病変部位の切除や縫合などを行うことを目的としていることだ。例え医師になったとしても、解剖のように人体の隅から隅まで思う存分に構造を見ることは二度と経験出来ないのだと知り、このような貴重な環境に身を置けていることに、益々感謝の念が深まった。

六週間の解剖を終えて納棺を迎えた際は、これまでの自身が行ってきた解剖実習を振り返るより、故

人の人生を想像し、感極まる想いがあった。ご遺体からは、言葉を通じてではなく身体を通して学ばせていただいた。六週間向き合ったことでご遺体の身体的特徴などを知り尽くし、そこからどの様な方だったのだろうと想像することは容易であった。他のご遺体と比べて下半身の筋肉が発達していたことから、生前はスポーツに取り組まれていたのではないか。手術した痕跡を見て最後まで生き抜こうとされていた様子が思い浮かんだり、この手で家族や愛する人を守ってきたのではないかと思ったり、様々な情景が浮かんでは消えていった。きっと人体の構造に個体差があるのは、遺伝的差異だけでなく、様々な生き方が反映されているからこそではないかとも思うようになった。死を迎えても尚、その方の生きた証は身体を通して伝わる部分がある。この事を知れば、大切な人を失って二度と言葉を交わすことが出来なくても、その人を感じることが出来ると思えるようになり、死に対する考え方も変わった瞬間であった。

最後の黙祷では、ご遺体が無事にご家族の元に戻り、大切な人と過ごせるよう願いつつ、改めて学ばせていただいた感謝の意を伝え、六週間の解剖実習に幕を閉じた。

改めて、ご献体くださった故人と遺族の方々には感謝の念に堪えません。解剖実習があったからこそ、将来医師となった際の命や死との向き合い方を考えるきっかけともなりました。また、共に解剖実習を乗り切った班員、支えてくださった先生方、多くの関係者の方々にも感謝申し上げます。

北神 咲季

初めこそ戸惑う場面の多かった解剖実習だったが、終わるころには考え方や人体構造の学び、倫理観について向き合い、成長することができたと実感している。

初日、実習が始まる前は、人体を解剖するというこれまでにない経験を前に、多少の恐怖や緊張があった。また、解剖実習は体力や精神力を多く必要とする実習であると聞いていたので、自身が万全な状態でこの先六週間学んでいけるかという不安があった。しかし、実習が始まり、ご献体いただいた方と対面した時、そのような恐怖や不安はすべて消えた。実際に人体を解剖させていただくというこの環境に、どれだけの方の努力や犠牲があったかと考えると、非常に身が引き締まる思いがした。この環境を用意していただいたからには全力で取り組もうと思った。

解剖が始まると、想像以上の難しさを痛感した。筋肉や神経の剖出には時間がかかり、静脈や細かい動脈を保存しておくのには注意力を要した。一つひとつの組織を剖出するたびに資料集や手引きの図を確認し、なるべく正確な理解をしようと努めた。困惑したのは、アトラスとは異なる位置に神経が分布していたことである。人体には変異による多少の個人差があることは学んでいたが、想像以上に教科書通りでないことをあらためて認識することができた。

解剖に慣れてくると、今までにないほどの疲れが出てきた。毎日一つの部位にフォーカスして学んでいくうちに、視野が狭くなってしまったこともあった。そのため、途中からほかの体の部位との関連や循環のつながりを意識して剖出するようになった。疲れはなお取れてはいなかったが、班員と協力して乗り越えることができた。また、毎実習前にご献体いただいた方に黙祷して思いを馳せる時間があったことで、感謝の気持ちを表して最後まで頑張ることができた。

納棺式では、今まで感じたことのない不思議な感情になった。目の前の六週間お世話になったご遺体を見て、心なしか寂しくなった。この方が生前どのような生活をしていたのか、私たちと同じ年齢だったときはどのように生きていらしたのか、私たちは知ることはないけれど、それでも想像を巡らせて毎日毎日この六週間過ごしてきた。ご献体いただいた方に手紙を書いたが、それでもなお伝えきれなかった感謝の言葉があったと考えている。

この六週間、解剖実習を行わなければ味わうことのなかったであろう感情や知識と多く出会うことができた。このような環境を作っていただいた先生方、ご献体いただいた方とそのご家族、その他の関わってくださった方々には非常に感謝している。この経験を決して無駄にせず、よりよい医師となるための道しるべにしていきたい。

西 晃輝

六週間にわたる解剖実習を終えた今、私は充足感と、医師という職業に対する新たな覚悟を抱いている。実習が始まる前、私は「人体を解剖する」という行為を頭では理解していても、その重みを本当の意味で実感できていなかったと思う。解剖実習初日に実習室の扉を初めて開けたとき、そこに整然と並ぶご遺体を前にし、私は恐怖と重圧に圧倒された。

解剖実習を通し、私は教科書やアトラスが示す知識が限定的なものであると思った。どれほど詳しく筋肉の起始停止を暗記しても、目の前の解剖で見える現実に勝る教材はなかった。筋肉を剥離してその走行を確認し、血管を一本ずつ丁寧に追い、神経の分枝を探し出す。手を動かし、実物に触れながら人体を学んでいくプロセスこそが、解剖学を真に理解するための唯一の方法だと思った。まさに「百聞は一見にしかず」である。

特に印象深かったのは、人体の「破格」に出会った時だ。例えば、腹腔動脈の分岐について、教科書やアトラスでは腹腔動脈から脾動脈、左胃動脈、総肝動脈が三方向に分岐するとされている。しかし、私たちが解剖したご遺体では、腹腔動脈からまず左胃動脈が分岐し、そこから脾動脈と総肝動脈が分かれるという走行をとっていた。当初は教科書との違いに戸惑ったが、その理由を先生は発生学的な機序を元に説明してくださった。胃が形成される際、背側腸間膜を通って腹腔動脈と左胃動脈が先行して構築され、その後に脾臓や肝臓が形成されていく。臓器が順番に作られるように血管も順に分岐していくため、初めに作られた左胃動脈から脾動脈と総肝動脈が分岐したのだろうという話を聞き、目の前の構造が決して突発的なものではなく、生命が形作られる過程そのものなのだと納得した。こうした教科書の枠を超えた学びは、ご遺体という「生きた教科書」に向き合い、納得いくまで考え続けたからこそ得られた知識であると思う。

この六週間は、ともに歩んだ班員たちの存在も欠かせなかった。実習開始前まではほとんど交流のなかった四人だったが、難解な剖出に頭を悩ませ、互いに知識を教え合い、時に疲労を分かち合う中でかけがえのない仲間となった。また、最終日に先生から「解剖を終えた今日が、医師としてのスタートです」と告げられたのも印象的だった。この六週間、ご遺体から学んだ無数のイメージは、今後の医学の勉強における全ての基礎となり、将来、目の前に現れる患者さんを理解するための基礎にもなると確信している。

私たちは、今回自らの身体を提供してくださった故人や、その決断を支えたご遺族の尊い意志の上に立って、医学を学んでいる。医者という職業は、多くの犠牲と感謝の上に成り立つものであることを、決して忘れてはならないと思う。解剖学実習はここで幕を閉じるが、ご遺体からいただいたイメージや学んだ知識を風化させることなく、今後も精進し続けたいと思う。

最後になりますが、私たちの教育のためにご献体いただいた故人と、そのご遺族の皆様に心より感謝申し上げます。また、日々私たちを温かくご指導くださった先生方、実習を支えてくださったすべてのスタッフの方々に、お礼申し上げます。

廣瀬 瞳

解剖実習を通して、死がとても身近に感じた。それと同時に、死を感じられる医師になりたいと思った。

解剖実習初日、初めて実習室に入ったときの光景が忘れられない。白い布とビニールに包まれて、菊の花を添えられたご遺体が並んでいた。解剖実習を行う気持ちの準備が全くできていなかったわけではないが、この光景を見て、改めて緊張感を覚えた。実習室が緊張感のある空気に包まれて、自分が医学生として実習に参加する覚悟と責任を持たなければならないと強く感じた。初めてご遺体に触れて、手

足に包帯を巻いたとき、包帯を巻くために持ち上げた足が重く、目の前にいるのが「人」であることを意識した。また、ご遺体と対面させていただいて、ご献体いただいた故人の生前に思いを馳せ、自分たちと同じように生きていた「人」であることを忘れてはいけないと感じた。解剖実習を進めていき、血管や神経、筋肉など、人体に関する知識や経験が増えていった。実際にご遺体を解剖させていただくことで、体験的に学習できた。特に、神経や血管の走行を自分で観察することで、人体への理解がとても深まったと感じた。一方、解剖実習を進めていく中で、目の前のご遺体が「人」であるという意識が薄れていったことは自覚していた。自分のメンタルを保つために割り切っている部分はあったが、自分が人として正常な感覚を失っているのではないかと不安になることも多かった。このような経験を通して、これから病気や治療を勉強していく中で、医学知識を身につけることが楽しみになると同時に、病気に注目しすぎて「人」として患者さんと向き合うことができなくなるのではないかと不安を感じた。

一方、この解剖実習を通して自分の死生観が変わった。幼稚園生の頃に自分の祖父母が亡くなったが、当時幼かったこともあり、実習前まで人の死を強く意識した経験がなかった。「大切な人が亡くなってしまったら悲しい。」、「医師になって人の命を救いたい。」という漠然とした思いはあったが、この実習を通して死への恐怖を強く感じた。生きていたい、生きていてほしいという思いが強くなったと思う。医学の勉強が進んで、医師になってもこの経験を忘れずに、死に慣れてしまわない医師になりたいと感じた。

加えて、身体的にも精神的にも疲労が蓄積する中で実習に参加し続けることができたのは、班のメンバーや友達が自分以上に努力している様子を見て、お互いに励ましあうことができていたからだと考える。

最後に、ご献体いただいた故人とご家族の皆様、解剖実習を支えてくださった先生方に心より感謝申し上げます。この経験を大切に、人間性豊かな医師になります。

古井 光

解剖実習が始まる日、初めて実習室に入った時に感じたホルマリンのにおい。ビニールに包まれた数々のご遺体が並べられた解剖台。これから対面するご遺体を眼前に静かに手元の資料に目を通している学生。実習室に一歩入るとそこは明らかに「空気が違う」と感じた。先生方の説明を聞き、ご遺体を解剖できるのは私たちが医学生だからだと理解すると、人体の構造について視覚、触覚、聴覚、全てを研ぎ澄ましてご遺体から得られるもの全てを学ばなければいけないと責任感を覚えた。

実習中は図や写真からは得られない強烈で新鮮な学びの連続だった。ご遺体とアトラスや手引きの図を比較すると図とほぼ一致する構造の部位もあれば全く異なる構造の部位もあった。実習が始まってすぐ、広頚筋を剖出する際にはアトラスの図よりもご遺体の広頚筋がかなり薄く、剖出に失敗した。この時、教科書に記されている解剖学的構造と実際の人体の構造には個体差があることを強く実感した。

六週間に及んだこの解剖実習の中で最も印象に残っているのは初日、ご遺体と対面しメスを初めて入れた時の感覚である。ビニールをとり、ネル布をめくり初めてご遺体と対面した時、私は強い緊張を覚えた。それは、未来の医学の発展のために自らの身体を献体くださった故人とご遺族からのバトンを受

け取った気がしたからだ。この身体を使って沢山勉強してほしい。そんなメッセージを受け取った気がした。そのメッセージの重みと私が当時感じていた使命感・覚悟が釣り合うものだったのかどうかは今もわからないが、全力で学ばせていただきます。と誓った日でもあった。

また、納棺式で岩田先生がおっしゃった印象に残った言葉がある。「医学は常に負け続けてきた」という言葉だ。歴史を振り返れば医学が目覚ましく発展してきたことに間違いはないし現代においてさらなる医療技術や治療法が次々と誕生していることも私は知っている。だからこそ、「負け続けてきた」とはっきりと述べられたこの言葉が強く胸に刻み込まれた。人は必ず死ぬ。どんな医学を駆使しようが、必ず死ぬ。では医学は必ず負けるのに、なぜ私は医学の道に進んだのか？岩田先生の言葉にそう考えさせられた。そして私は、医学の目的は「勝つ」ことではなく、患者の命や生活を大切にし、その人らしい人生を送れるように支えていくことにあるのではないかと考えた。この解剖実習は人体の構造だけでなく、ご献体くださった故人とそのご遺族から命の尊さ、医学を学ぶ責任とは何かについて学ぶことができた非常に有意義で濃密な六週間だった。

最後に、貴重な学びの機会を与えてくださった故人とそのご遺族、ご指導してくださった先生方に心より感謝申し上げます。医学を学ぶ責任を忘れることなく邁進いたします。

吉井 一花

まず初めに、この解剖実習のためにご献体くださった故人とそのご家族の尊い意志に心より感謝申し上げます。また、実習中ご指導いただいた先生方、技術職員さん、TA の方々にも深く感謝申し上げます。

二年生になると解剖実習が始まるということは分かっていたが、それまではどこか遠い出来事のように感じており、実際に自分がご遺体と向き合う姿を具体的に想像することはできていなかった。そのため、実習初日に解剖実習室へ入り、ビニールと白い布でくるまれたご遺体が並べられている光景を見たときは、緊張と不安が入りまじり、身の引き締まる思いがした。

実習が始まると、想像以上に難しさを感じる毎日だった。解剖学の知識が十分に身についていない状態で実習が始まり、予習や復習をしながら実習と並行して学習を進める必要があった。しかし、最初は勉強の仕方も分からず、実際に人体で見る構造と自分が勉強してきたことが結びつかないことに焦りを感じた。何をどのように勉強したら良いか分からず、自分の未熟さや情けなさを痛感し、悔しい思いをすることも多かった。そのような時に班員がわからないことを丁寧に説明してくれたり、一緒にアトラスを見ながら考えたりしてくれて、何度も励まされた。この班でよかったと心から思う。自分も班員の役に立てたらという思いで勉強に取り組むこともできた。

実習を通して最も強く感じたことは、教科書やアトラスと実際の人体は大きく異なるということである。アトラスでは血管や神経、筋肉などが分かりやすく整理して描かれていたが、実際の人体ではそれらがそれぞれ重なり合っているためとても複雑で、目的の構造を見つけるのが難しかった。アトラスなどでは個別に理解していた構造も、実際に人体を観察することで、それぞれの構造が立体的に繋がっているということも実感した。自分の手を動かしたからこそ実感できたと思っているので、本当に解剖実

習を経験できてよかったと思う。

特に印象に残っているのは、毎日の実習の始まりと終わりに黙禱を行い、ご遺体の胸元に白菊の花をお供えしたことである。知識が追いつかず苦しさや焦りを感じたり、体力的にもしんどさを感じた日々であったが、黙禱をすることで、ご献体くださった故人の尊い遺志を無駄にしてはいけない、という気持ちになり、気が引き締まった。

実習中、先生が「医学部の学生しか、このように自分の手で自由にピンセットを動かしながら人体を学ぶ経験はできない」と仰っていて、それがとても印象に残っている。自分は医師になるための学びを積み重ねているんだという実感と、人の身体から学ばせていただくことの責任の重さも強く感じた。この経験は決して当たり前のものではないので、一つひとつの実習を大切にし、学んだことを将来患者さんのために活かせる医師にならなければいけないと強く感じた。

最後にもう一度、この解剖実習のためにご献体くださった故人とそのご遺族の尊い意志と、この実習を支えてくださったすべての方に心より感謝申し上げます。この六週間で学んだことは、解剖学の知識だけではなく、命の尊さ、医学を学ぶ責任、そして学び続ける姿勢の大切さを身をもって実感することができました。ご献体くださった故人の思いを忘れず、一人ひとりの患者さんに誠実に向き合い、信頼される医師を目指して、これからも努力を重ねていきたいと思います。

米山 仁子

「医学部では、二年生になると必ず解剖実習がある。」

私が高校生の頃、医学部に進学したいと両親に伝えた時、初めてこのことを知った。人の身体を解剖するなど、当時の私には全く想像もつかず、怖いと感じたことを今でも覚えている。それでも医師になりたいという思いは変わらず、解剖への不安を心のどこかに抱えながらも、医学部合格に向けて懸命に勉強した。

幸いにも医学類に進学することができたが、解剖実習が近付いてきた五月上旬ごろ、私は緊張と不安からひどい腹痛に襲われた。自分と同じように生きていた方のご遺体を解剖することを考えると、胸が痛み、最後までやり遂げる自信が持てなかった。

解剖実習初日、緊張と不安でほとんど食事も喉を通らないまま解剖実習室へ向かった。友人や家族から励ましの言葉をもらい、解剖実習をやりきる覚悟はできていたつもりだった。しかし、それは自分自身へ言い聞かせていただけだったのかもしれない。

ご遺体と初めて向き合ったときの緊張感は忘れることができない。その瞬間、私たちの学びのために尊い身体を献体してくださったことがどれほどありがたいことなのか、そして解剖を通して学ばせていただけることがどれだけ恵まれた機会であるのか、心の底から実感した。そして私は、この貴重な機会を必ず学びにつなげることで恩返しをしようと決意した。

解剖が始まると、思い通りにいかないことも少なくなかった。手引書やアトラスで十分に予習してい

ても、神経や筋肉の同定に苦戦することがあった。そのたびに班員と話し合いながら剖出を進めていった。実習を通して血管や神経の太さ、筋肉の厚さ、臓器の重さなどには個人差があり、人体は教科書通りではないことを身をもって実感することが出来た。

そして、私にとって特に印象深かったのは納棺式である。六週間学ばせていただいたご遺体とのお別れの日、私は解剖実習初日の緊張と不安でいっぱいだった自分を思い返していた。あの日と比べて、どう成長できただろうか。尊い命を預かる医師になることへの自覚と覚悟、そして命を大切にして生きることの大切さを以前より深く実感できたように感じた。一人ひとりの命にはその人の家族がいて、その人のかけがえのない人生がある。だからこそ、誰一人として軽んじてよい命など存在しないのである。また自分と同じように人生を歩んでこられた方のご遺体を解剖させていただいたことへの感謝を必ず忘れてはならないと改めて強く感じた。今回の解剖実習を通して、患者さん一人ひとりの命に真摯に向き合い、丁寧な医療を実践していく覚悟を持つことが出来た。

最後に、ご献体くださった故人ならびにご遺族の皆さまに心より感謝申し上げます。この実習で得た学びと感謝を胸に、将来医師として多くの患者さんの命と健康に貢献することで恩返ししていきたいと思います。そして実習を様々な面で支えてくださった先生方にも心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。